
あなたの懺悔は何ですか？

わたるくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたの懺悔は何ですか？

〔π-π〕

【作者名】
わたるくん

[၁၅၁]

俺を助けてくれるのは悪党ばかり！？

殺し屋、強盗犯、サギ師、麻薬密売人、悪徳警官、闇医者、etc

宇佐美宗也の務める会社は、不況の風にあおられて倒産してしまつた。

自分を見つめなおすため、遠く離れたイギリスまでやつてくる。

そこで巻き込まれる大きな事件。宗やは無事生き残ることができるのか！？

ボーイ・ミーツ・ガール

ロンドンにある裏通り——

宇佐美宗也は、男たちから必死に逃げていた。

（なに……が、いつたい何が起こったんだよ！　どうして……俺が追われなくちゃならないんだ！？）

息も絶々（たえだえ）に、深夜の人通りのない石造りの街並みを駆けぬける。

初めて訪れた街の道など知っているはずもない。それでも後ろを追いかける数人の男から逃げだすために、とにかく走り続けた。

後ろを振り返つてみる。

ピシッとした黒服を着た強面のお兄ちゃんズも、今では汗だくになつて追いかけてくる。

別に宇佐美宗也はすごい陸上選手でもなければ、力と体力自慢のムキムキマッチョ君でもない、ただの会社員だった男だ。そんな一般市民が、映画の中でしか登場しないような人たちに敵う訳がない。しかも拳銃まで持しているっぽい方たち相手に、どうしようと？もう逃げる一択しか選択肢がないじゃないか。

一応、住宅街だということもあり発砲とかはしないようで、今までなんとか逃げ延びてはいるが、捕まつたら最後どうなるかなんて解つたもんじゃない。

とりあえず視界に入ったゴミ箱を蹴飛ばし、時間を稼ぎながら走り回る。

そう、今思えばあの会社が悪いのだ。この不景気の中、小さいけ

どもようやく就職先を見つけて入社したはいいが、数年もしない内に会社が倒産。

それを知らずに出社した俺たちの前に、突然派手なステッフを着た方たちがドアを蹴破る勢いで入ってきた。

いきなりのことに戸惑う社員だつたが、彼らが言つには、社長が相当な額のお金を探していたのに昨夜の内にお消えになられた。なので、とりあえず社長の捜索と会社にあるすべての物を押収しようどここへやつて来たらしい。

んなバカな……。

少ない社員一同みな呆然としていたが、ペタペタと赤い押収と書かれたシールを貼られるのを見て、だんだんとこれが現実だと理解したみたいだ。

それと同時に、全員に社長がどこに行つたか知らねえか？ なんて、ドスの効いた声で詰め寄られるんだから恐怖のレベルも半端じやない。

だつて若い女性社員なんて少し泣いているし。

終いには、軽い尋問まがいなことまでされてしまつ。その後は家に帰つても良いらしく、俺も含めて全員急いで会社から出て行つた。しかし最後に、テメエら社長の居場所が分かつたら、ちゃんと連絡しろよ？ もし言わなかつたら、海にでも……

(“海にでも……”つてその後のセリフなんですか！？ そんな凶悪な笑顔で言われたら、すゞいよろしくない事になりそうだ！！) とも思つたが、そんなことを口に出して聞き返せるわけもなく、そそくさと家へと逃げ帰つた。

後日、仕事がなくなつてしまつた宗也は職業斡旋所に何度も通うはめになるのだが、この就職難な時代に、高待遇な職種が見つかるはずもない。

そんな時、ふとあることが頭を過ぎつたのだ。

(そうだ！ 海外へ傷心旅行に行こうー！)

今になつて思えば、何でこんなことを考えたのかは分からぬし

脈絡すらもないが、八方塞りなこの状況に、少し頭がおかしくなつていたのだろう。

しかし、それを本当に実行してしまったのだ、そこでどんな事件に巻き込まれるかも知らずに……。

そんなことがあり色々と考えた結果、ここイギリスへと旅行に来た。

ツアーで行くのも自由な時間がなくなりそうだし、なるべく一人にもなりたかったので、すべて自分で手配してこの地にやってきたのだ。

イギリスのヒースロー空港からロンドンを中心として、いろいろ名所を回るつもりでいたのだが、最初の方はまだ良かつた。

見たことも無い建造物や街並みに興奮しながら、初の海外の思い出にと写真を取りまくり、テレビなどでしか見たことが無いロンドンの風景を満喫していく。日本での嫌なことや時間も忘れて夢中になっていると、だんだんと日も暮れしていく。

イギリスも先進国の一角だ。日本ほどではないにしろ治安はいいとは思うが、さすがに何かが起こっては遅い。

後ろ指を引かれながらも、あらかじめ予約しておいた宿へと足を向けた。

宿：コッペリア

薄汚れた建物に陰気な雰囲気。目の前に建つ宿に少し思つてこりもあつたが、少しでも安く済ませるためにこの宿を選んだ。

ロンドンは観光地のためか、ホテルの値段は以上に高い。だいたい一泊あたり80ポンド、日本円で約10,140円ほど。そんなお金は逆立ちしても出でこないので、一泊30ポンドという激安ホテルだ。もちろんルームサービスなどはまったくない。ただ寝るだけの空間を提供してもらつといつだけだ。

深夜、宗也は喉が渴いたので、キーを預けて近くの酒屋で酒を買おうと外出した。ホテルの店員さんに店の場所も聞いたのでバツチ

りだ。

一応、宗也は大学を卒業した身だ。しかも外国語学部だったので、日常会話くらいの英語ならなんとか話せるレベルである。

宿を出て、暗い夜道を一人で歩き出した。

やはり初めての海外のため、最初は緊張のせいで不安もあつたが、一人で見知らぬ外国の土地を歩いているという達成感にハイなテンションになってきた。軽く鼻歌を歌いながら酒屋へと歩いていると、街灯のない真っ暗な通りの隅でなにかを殴打するような鈍い音が聞こえた。

普通なら無視するところだが、今の俺は、一人で何でも出来るもん、な状態である。

音のした方へと近づき建物の角から覗き見ようとすると、ぼんやりと人影のようなものが見える。暗がりでよく見えないので、少し目を凝らす。すると、何人かが集まって地面に向かって棒状の物を叩きつけているようだ。

誰かが遊びかイタズラでもしているのか？と思つていたが、次第に暗闇に目が慣れてきたため、その光景をはつきりと見ることができた。

いや、見てしまった（・・・・・）。

円を囲むように複数の男が、鈍器を振り下ろしている姿。

その中心には、倒れている一人の男の姿。

倒れている人の頭と身体からは血が大量に流れしており、ピクリとも動かない。それでも執拗に殴り続ける黒服を着た男たち。

そのあまりの衝撃的な光景に、宗也はウツと声を上げ、胃から込み上げる吐き気を必死に押さえ込んだ。

その声に反応したのか、男たちは殴るのをやめて宗也の方へと视线を向けた。そして驚きの表情と恫喝が飛び、突然コチラに走つてくる黒服たち。

危険な状況を理解した宗也は、彼らに背中を向けて駆け出した。

ここから夜の街での大逃走劇が始まった。

街の景観を大事にしているのか、ただ設置していないだけなのかは知らないが、街灯すらギリギリ道の輪郭が分かるくらいしか無い。こんな街だつたらジェイソンさんもフレディさんもやりたい放題だろうさ！－ つと心中で絶叫する。

時おり、微かに雲の隙間から漏れる月の光が、宗也の流す涙をキラキラと輝かせていた。

大声を上げても周りから反応すらない状況に悲しくなる。

子もない。

づいていた。

これはいいよ語んだか? と諦めかけたその時、視界の隅に古い教会が見えた。これが最後のチャンスだと思い、残りの力を振り絞つて駆け抜ける。

（神様！俺は仏教徒なので筋違いかもしませんが、どうかお助けを！！）

死に物狂いでたどり着くと、教会の廟に体当たりでもするかのよ
うに、

「助けてください！誰かに追われているんです！！」

宗也は、教会の扉に腕を力強く叩きつけた。何回も、何回も、叩

いても返事はない。すぐ後ろには、黒服の男たちが迫ってきている。

「だれか、誰かいませんか！？」

絶望を感じながらも、可能なかぎりの大声だした。

「何だよ……うるせえなあ。今、何時だと思ってやがんだよ」とすると中から人の気配と寝起きの声が聞こえ、微かな希望が芽生えてくる。

「すいませんっ。怪しい人たちに追われているんです！　お願いですから中に入れてください！！」

慌てているせいか早口になってしまったが、ガチャリと木製の扉が開かれた。

「ああん？　誰だよテメエ……」「ぬあつ！？」

扉を開けた人物を見て宗也は驚き、悲鳴を上げてしまう。出てきたのは年若いシスターのようだが、その鬼でさえも殺してしまいそうなほど凶悪な目。“私は人を百人殺しました”と言つても、簡単に信じてしまいそうな貫禄を醸し出していた。

彼女のレーザーのような恐ろしい視線に、今までの状況を忘れて身体を縮こませる。

その姿は近くでみると、ライオンに睨まれる生まれたばかりのシマウマのようだ。宗也の反応に彼女は気が立つていてようだが、通りの向こうから走つてくる黒服の男たちを見ると、片眉を吊り上げる。

「おい！　何、ぼーっとしてんだ！！　やつをと中に入れ、アジアン！！」

まだ恐怖で動けない宗也の首下を掴んで、教会の中に引っ張り込む。為すがままの宗也は、その勢いに押され床に頭をぶつけてしまった。

「いてえ！！！」

そのおかげで目が覚めたのか、激しい痛みで我に返る宗也。

それを無視して、シスターは教会の扉を勢いよく閉めて鍵をかけ

た。さらに、中に並んでいた机や椅子を扉の前に何個も積み上げて、簡単なバリケードを作っている。

その時、扉を叩きつける音と男の怒鳴り声が響いてきた。

「おるあーー よくもここまで逃げやがって、出てこいやあクソヤ 口ーー！」

「ヒイイイイーー!?」

情け無い悲鳴を上げながら、奥へと逃げる宗也。

「おいおい……。テメエは男だろ、もつと堂々としてらよ。」

呆れたような表情をしながら、シスターは修道服からゴジゴジとした金属製の物体を引き抜いた。

宗也はそれを恐々と見ると、

「つて、それ拳銃だらうが！！ なんでシスターがそんなもん持つてんの！？」

「ハーン？ そりゃーアレだ。どつかの神も言つてんだろう“人様に迷惑をかけるなら、いつその事死ね”ってさ」

さも、当前のように言つシスター。

「んな殺伐とした神様がどこにいるんだよ！？ そんなの神様とうより、悪魔に近いだろ！！」

「なに言つてんだよ。聖書じやあ悪魔も神の一部だろ、ほとんど同じじゃねえか。それに悪魔つて呼ばれてるヤツよりも神の方が圧倒的に人を殺してるからな、そんなヤツを信じてる方が……これ以上は職業柄なあ」

「シスターのくせに、神様を信じて無え！？」

そして、ついに教会の扉が男たちによつて破られた。一斉に中へとなだれ込む黒服ズ。手には拳銃が握られている。

それを見て、宗也は慌てて礼拝堂にある教壇の下に隠れた。

「おらあー、どこに隠れやがった、出てこいーー！」

もうここまでかっ！？ と諦めかけていた時、暗闇から一発の銃声が鳴り響いた。

その音とともに、黒服の一人が床に倒れこむ。

「だれだあ！？ …… グウアツ！！」

さらに続けて一発だけ銃声が鳴ると、叫んだ男がまたもや倒れる。

「クソツ、全員固まれ！！」

薄暗い教会の中で、次々とやられる仲間を見て一人に黒服が叫んだ。

「いけねえなあ …… 一箇所に集まるなんて、ただ殺してくれなんて言つてるようなもんだぜ。最近のマフィアは狩りのやり方も知らねえのかい？」

ズガガガガンツツ！！

密集する男たちを嘲笑うかのように、暗闇から赤い火花が迸る。
それと同時に辺りを警戒していた男たちは小さな悲鳴とともに地面と熱い抱擁を交わすのだった。

タツタツタツタ……

中にはいる黒服をすべて倒し終わると、外から何かが遠ざかるような音が聞こえてきた。スターはチラリと外を一瞥すると、遠くへ走り去る一人の黒服が見える。どうやら一人だけで待機していたようだ。

その姿に目を細めて舌打ちするも、それを無視して宗也に近づいていった。

「もう終わつたぜ。いつまでも小動物みたいに隠れてないで、さつさと出てきたらどうだ？」

拳銃をしまい、教壇の方へと声をかけた。

「終わったのか？」

少しだけ教壇から顔を覗かせて、そのままあたりを確認する。

「ああ、テメエが泣き喚いてる間にな。神聖な教会に土足で踏み込みやがつて……まったく、こいつ等を今すぐにブチ殺してやりたいところだぜ」

忌々しそうに咳きながら、転がっている黒服を蹴り飛ばす。

「おい、アジアン。こいつ等を外に放り出すから手を貸しな」
宗也はおずおずと教壇から這い出て、シスターに近づいていく。

「なあ……この人たちはみんな死んでるのか？」

倒れこむ黒服を見て、恐る恐る尋ねた。

「ハァン？ 死んでるよう見えinのか？ 血も流してねえのによ
よく見てみると黒服たちは氣絶はしているようだが、血は一滴も
流してはいなかつた。

（もしかして、ゴム弾か何かで撃つたのか？）

疑問に思いながらも、とりあえず死んでいないことに少なからず
安堵して、言われたようにシスターと男たちを外へと運び出した。
そのまま壊れた扉の前に、無造作に放り出す彼女。

「ちょっと待て！？ そこに置いたまでもいいのか？ 目を覚ま
したらまた襲つてくるんじやないか？」

「大丈夫だつてーの。特別製のショック弾で撃つんだぞ？ 丈夫
なヤツでも丸一日は意識は戻らねえよ」

何かよく分からnいが、大丈夫らしい。

（アレか？ 漫画とかである、着弾すると電気が流れるゴム弾のこ
とか？）

倒れていた五人を全員運び出し、一人とも教会の中へ戻つた。戦
闘で散らかつた礼拝堂を突つ切り、奥にある小さな扉の前へとシス
ターに案内される。

そして宗也は扉の上に書かれている文字を読んだ。

（懺悔室？）

中に入つて少し待つていろと言われたので、大人しく部屋へと入つた。

そこは一人しか入ることができないような狭い空間で、宗也が椅子に座つただけで、圧迫感を感じるほどだ。

しばらく中で待つていると、入つてきた扉の対面にある壁に突然小さな四角の穴が開いた。

「それでは何があなたに起つたのか、わたしに教えていただけませんか？」

そこから、女性の優しい声色が聞こえてくる。

「…………だれ？」

まさか、凶悪シスターの他にもまだこの教会に人がいたのか？と疑問に思う宗也。

「何を言つてらつしやるのですか？ 先ほどあなたを助けて差し上げたではありませんか」

「ええ！？ ジャあ、あの拳銃を持つてたイカレたシスターさん！？」

（…………）

無言になり、壁の向こう側からすごい怒氣を感じるが、何事もなかつたように話を続けられた。

「とりあえず、ですね……まずはテメエ様の名前から教えていただきましょうか。こんなふざけた連中を『招待してくれたクソヤロー様の名前を』

「ちょっと待て！ 口調が戻りかけてる！？」

やつぱり怒つてらつしやつたみたいだ。

明らかに不機嫌な彼女に、尻すぼみしながらも潔く答える。

「宇佐美宗也です。日本から旅行に来ました」

「日本人なのですか、その割に流暢な英語を話されているみたいですね」

「それは一応、外国語系の大学を出て、勉強もしてたからさ……専門用語とかじやなければ、ある程度は話せる」

彼女から聞いてきたくせに、へえーと興味なさそうに返事をした。
「まあ、そこまで英語がお話できるのなら話は早いですね。あなた
のような一般人、しかも愛と平和を謳^{うた}っている日本人が何故追われ
ていたのですか？」

宗也はこれまでの宿から教会までの逃走劇のこと思い出しながら、彼女に伝えた。すると、

「それはまた……不運なことですね。ですが、これからどうする
のですか？ おそらく、逃げ帰った黒服の方があなた様のことを報
告して、また追われる事になると思いますよ」

「改めて言わないでください……薄々（うすうす）、解つてしまし
たから。だから、どうしようか悩んでるんだ」

両手で頭を抱え込む。その様子を見てシスターは、

「そんなにお困りのようでしたら、私があなたをお助けしましょう
か？」

「助けるって……教会のシスターさんが、何を？」

確かに、先ほどは教会に直接踏み込まれたので、手を貸してくれ
たのかもしれないが、特に彼女が宗也を助ける義理など、どこにも
ないはずである。逆に厄介^{厄介}だと持ち込んでしまったことに対して、
激怒するならまだ理解できる。しかし、彼女がわざわざ助けるなん
てどう考えておかしい。

（仮に理由があるとしても、彼女は何から俺を助けてくれるんだ？
アレか、また銃撃戦か？？）

「それは……私が唯一信じているこの銃で……」

「あいいいい！ なに予想通りに物騒な解答してくれんてんの！？
その前に“唯一信じている銃”ってなんだよ、神様とか信じてな
いのか！？ いやつ言うな！ さつき凶悪シスターモードだった時
のセリフ憶えてるから！！」

彼女の返答に、つい勢いだけでツッコみをしてしまう。

「ふふっ、ソーヤさんは中々に愉快な方のようですね。…………け
どなあ、あんまり俺の機嫌が悪くなるようなことを言つなよ。誤つ

てテメエの尻の穴を増やしちゃつかもしけねえからな

「ヒイイイイ！？ 申し訳ありませんでした… フ「ゴシ」

狭い懲悔室の中で頭を下げたせいか、田の前の壁に頭をぶつけてしまった。

「解ればよろしいのですよ。それに、無理に私の助けを受ける必要はございません。手つ取り早いのは警察に行つて保護してもらつことですね。……まあ、すぐに日本に帰らなくちゃならないとは思いますが」

助けてくれると誓つたわりに、以外にも簡単に引き下がるシスター。

「やつぱりそういうりますか。わざわざ助けてくれると誓つてくれたのにすいません」

「いえいえ、それでは今夜はこの教会にお泊りになりますか？ 一晩くらいでしたら、お部屋をお貸しますよ」

「そんな、いいんですか？ 僕がここにいると、また迷惑をかけることになるかもしませんよ」

「それは今更ですね。一応ここも神のお膝元ですから、『迷えるバカ』をお助けることは当然といつものです」

「そこは普通、迷える子羊なんじやあ……」

不安を覚えつつも、宗也はシスターの好意を素直に受けたことにした。

しかし、懲悔室を出て部屋に案内されるかと思つたら、何故か再び礼拝堂へと連れ去られてしまつ。

「では一晩お泊めする代わりに、一人でここ掃除をお願いしますね」

「ええっ！？ このめちゃくちゃに散らかってる礼拝堂を一人で、ですか！」

驚いている宗也に向かつて、シスターは女神のよつな笑顔で答える。

「はい、寝不足はお肌の天敵なんです。それにこうなつたのもあなた。

たが原因ですか。しっかりと責任は取つてもらわないと…

：テメエをブチ殺す

「……はい」

「あつ、言ひ忘れていましたが、掃除が終わるまで寝る」とは許しませんからね。これも神への奉仕だとでも思つてください」シスターは女神のような笑顔でそれだけを言い残し、一人奥の部屋へと姿を消した。

それをただビビリながら見送るしかない宗也。

その後、ため息を吐きながらも仕方なく掃除を始めるが、どれだけ頑張っても朝まで終わることはなかつた。

無論、一室部屋を貸してもらう所か、寝ることすらもできなかつた哀れな宗也であった。

リナリスト・J・フォルスター

(はあ……やつとキレイになつた)

宗也は、ようやく礼拝堂の掃除を終えた。

壊れた扉の付近に、バリケードのように組まれていた椅子や机を元の位置に戻し、破損した物や空薬莢などのゴミを、教会の外に設置されていた焼却炉へと放り込んだ。

昨夜の戦闘が終わって、掃除を始めたのが深夜三時ごろだったはずなのに、上を見上げれば建物の隙間からは太陽が顔を出している。手を真上に掲げ、グゥーーっと伸びをしてみれば、就職してから運動していなかつた身体がギシギシと鈍い音を奏でる。軽い痛みが走る腰を擦りながらも、チラリと扉付近に目を向けた。

そこには、黒服を着た男たちが四人仰向けになつて寝転がっている。彼らはシスターに“ショック弾”なる非殺傷の銃弾で撃たれまま、未だに目を覚ます気配すらない。一応、昨夜シスターに散らかっている所を片付けておけと言われたが、正直この扉の前にゴミのようにならかっている強面の方たちはどう片付けるというのか。（つていうか、これを片付けるつて表現はないだろう。アレか？）任侠ドラマとかにあるコンクリに詰め込んで海に投げ込んで決つて意味か？？）

しばらく頭を抱えて悩んでいたが、礼拝堂の中といつ訳でもないし……という適当な理由で放置しておいた。

教会の中へと戻り、先ほど元の位置に戻した椅子に腰掛けた。そのままため息を吐きながら、背もたれに体重をかける。

「結局ここに泊めてくれるとか言いながら、まったく休むことができなかつたな」

ポツリと小さく文句を言いながら、昨日のシスターのことを思い出す。

黒服の男たちをたつた一人だけで倒し、神に仕えているとは到底

思えないほどの暴言を吐く凶悪シスター。

最初にエンカウン特した時など、恐怖のあまり情けない悲鳴を上げてしまったほどだ。

そして懺悔室で話した彼女のキャラの変わりよう。あれはもう一重人格と言つてもいいくらいだろう。

もしくは、“実は私たち双子なんです”と、同じ顔をしたシスターが一人登場しても、それを信じる自信がある。

（まあ……たまに俺が失言したら本性が出てきてしまう所があるから、それは違うと分かるんだけど）

しかしそんなことを思つてしまつほど、性格が180°も逆転してしまうのだ。

（まるで、天使と悪魔が合わさつたような人だよな……しかも天使モードの時はちょっと可愛いと思つてしまつたし）

氣だるげな様子で天井を見上げ、目を閉じる。

その時、奥の部屋から小さな足音が聞こえてきた。

しかし、もの思いに耽つている宗也は、その音に気づかないようだ。

足音はだんだんと宗也に近づいていき、彼の後ろで静かに立ち止まつた。そして、

「動くな……」

ビクウツッ！と身体を震わせながらも背後を振り向こうとしたが、頭に何か硬い物が押し付けられた。昨夜の恐怖が身を過ぎり、宗也の身体が一瞬で硬くなる。

その様子に背後にいた人物は笑い声をあげた。

「クフフッ、そんなにビビんなよ」

その一声とともに頭に突きつけられていた物の感触がなくなる。恐る恐る振り向くと、そこには昨夜助けてくれたシスターが、口の端を吊り上げて嘲笑わらわらこぶを浮かべていた。

そして、手には先ほどまで宗也に突きつけられていたであろう物が握られていた。

「？」

「なんだ、銃だとでも思ったか？　ただの遊びでそんなのを抜くわけがないだろ」

宗也の反応に未だ笑いが押さえられないのが、シスターはクツクツと意地汚く笑う。

そして、礼拝堂を見渡し一言。

「なかなかキレイになってるじゃねえか。けど、テメエの顔を見る相当大変だつたみたいだな」

彼が寝れなかつたことなど、最初から分かつてているのだろう。彼女はこの教会に泊めてやるとか言いながら、散らかつた礼拝堂の掃除を任せて、自分はそそくさと寝室へと引っ込んでしまつた。

宗也にどの部屋を使つていいのかも言わずに……

「まあ、あれだけ汚かつたんだ。最初から分かつていたんだがな」

「……おい」

辛かつた片付けを思い出して、シスターを軽く睨みつけた。

「そんなに怒るなつて。昨夜テメエの命を助けてやつたのと、これから警察まで連れて行つてやる報酬の代わりだとでも思えばいい」それを言われてしまつたら、宗也とて文句を言い返すことなどできない。

自分の所為でシスターを事件に巻き込んでしまつたこと、理由もないのに命まで助けてもらつたこと。

さらには警察まで連れて行つてくれるといつ、ここまでしてくれた彼女に礼を返さないほど、宗也は礼儀知らずではなかつた。

「そうゆうことなら別に構わないわ。ところで、今さらなんだけどシスターの名前はなんていいうんだ？　俺の名前は教えたけど、君からはまだ教えてもらつてないぞ」

「ハアン？　そうだつたか？　まあいいわ、俺の名前は『リナリス・J・フォルスター』

てんだ。神に仕える敬虔なる使徒。ついでに、美人シスターでもある

「……とつあえずシシ「ミ」所はたくさんあるけど、あらためてよろしく

しく

「ああ、もう会う」とすらない短い付き合いだと思つがよろしくな

互いに笑顔で握手をする一人。

苦い笑顔の宗也と、好戦的な笑顔のリナリストいう違いはあるが

…

「それでどうする。さっそく警察まで行くか？ テメエの状況を考えたらできるだけ早いほうがいいぞ」

笑顔を消し、神妙な顔になるリナリスト。

彼女の言うとおり、逃げるなら早いほうがいい。

いつ外に倒れている黒服たちが起きるのか分からぬし、一人逃げた男もまた仲間を引き連れてここに戻ってくるかもしれない。それを踏まえると、やはり彼女の提案を受けるのが一番だろう。

すぐにそこまで考えた宗也は頷いて了解の意思を示した。

「なら外の門の前で待つてな。 車を用意してくるからよ」

そう言つた途端、リナリストは立ち上がり教会の外へと歩いていく。宗也もそれを見て、急いで彼女の背中を追つた。

一人、門の前で待つこと十数分。

しばらくすると宗也の前に一台の車が止まった。

手動の窓をグルグルと回して開けると、一人の女性が顔を出す。最初は知らない人だと思い驚いたが、待たせたな、と特徴のある男勝りな声からリナリストだと分かり安堵した。

よく見ると、彼女は、シスター服から私服に着替えたらしい。細身のジーパンにTシャツという非常にラフな格好で、女性らしい見た目よりも機能性や動きやすさを選択したようだ。

そのため細いくびれがある腰やスラッシュした長い足が強調されている。胸は少し小ぶりのようだが、ピチッとしたTシャツのせいか、二つの小山がはつきりと見えてしまい宗也は視線に困ってしまう。

そして、なにより一番目を引いてしまうのは彼女の髪。

緩くウェーブが掛かり、肩の下ほどまで伸びた美しい金髪が、太

陽の光を反射してキラキラと輝いている。

そして、時折吹く風がフワフワと髪を揺らす。

その姿は顔の造形と合わせ絵本に登場するような女神のようで、宗也はボートと彼女に見惚れてしまった。

「なに突つ立つてんだよ。さつさと乗れソーヤ」

彼女の言葉にハツと目を覚ます。

そして慌てて車の助手席に乗り込む。

それじゃあ行くぜ、とアクセルを踏み込んで教会を後にした。

教会を出発して、今はイギリスの通りをひたすら車で走っている。宗也は日本とは違う街並みを、窓越しから無表情で見つめていた。古い石造りの建物の間、車が一台しか通れないような狭い通りを右往左往しながら進む。まさか道が分からぬのか? とも思ったが、道路に設置されている標識を見るかぎり、一方通行が多いようだ。

母国のように一車線の道が少なく、車のすぐ脇には歩行者やマウンテンバイクが普通に行きかっている。

朝の通勤のためか、道行く人々の動きも何かとスピードイーだ。

そんな中々見ることのできない街の風景がどんどん過ぎ去っていく。

珍しい景色に本當ならテンションも上がるはずなのだが、宗也の表情に変化は見られない。某世界的魔法使いの映画に登場するようなバスや、有名な観光名所の前を通りてもそれは変わらない。

まるで長年イギリスに住んでいて、こんなものいつも見慣れているとでも言つよつて、淡々と視線は流れる外の景色の一点を凝視したままだ。

その姿を見かねたのか、

「ソーヤさん、何をそんなに思い悩んでいるのですか？ 先ほどから外の景色を熱心に見ていて、というわけではないでしょう」

天使モードになつたりナリスが心配するように声をかけた。

その問いに、宗也はようやく反応を示す。そして、ゆっくりとドライバーの方へと向き直り、

「いや、こう……改めて考えてみると何故こんな状況に追い込まれているのか、よく分からなくなつてさ……」

「それは、あなたが事件の現場を目撃してしまったからでしょう。それが理解できないほど難しい疑問ではないと思いますが」

何を当たり前な、とでも言うような顔をするリナリス。

しかし、世界でもトップレベルに治安の良い日本で生まれ育つた宗也は、あのような非現実的な事件に巻き込まれることなど、一度もなかつた。

映画や漫画ならば、ドキドキハラハラで済むかもしぬないが、それが自分の身に起きたとなると、恐怖や困惑しか思い浮かばない。

殺人事件など、日本でも何度もニュースで報道されるため知つてはいるものの、それはあくまで間接的な知識である。死ぬという可能性が、直接的に自分を襲つた場合の相手側の動機など、頭では理解できないのもしれない。

「それは分かつてゐるさ。けど、今まで自分はあるか、俺の周りの人でも体験したことがない事態になつてゐるんだ。自分で考えても、リナリスに言われたとしても、頭で理解が追いつかないんだ。俺は物語に登場するようなヒーローでもないし、拳銃すらもリアルで見たことがない平和な国的一般市民なんだから」

暗い表情で話す宗也は、まるで呟くような声色だ。

「ハアアア——」

それを聞いて運転中にも関わらず、大きな溜め息を吐いた。

「大人しく聞いていれば、また世の中をナメたようなことを言いますね、ソーヤは。それは、あなたが昨夜まで偶々平和に暮らしてこ

れただけなのです。

この世界にはあなたが想像もできないほどの『『悪』』が存在しています。昨夜あなたが巻き込まれた事件は、その中のほんの一部にしか過ぎません。

あの男たちの出で立ちを見る限り、おそらく裏に潜んでいるマフィアの下つ端でしょう。のような者たちを使い、決して表の世界には出てこないような組織もあります。

昨夜のような事件があつても、マフィアを統括している者たちが警察などに捕まることなどありえないと言えます。

なぜなら国の内部や重要機関に深い繋がりを持つている場合が多いからです。彼らは巨大な政府組織が相手であつても、罰することができるません」

リナリスは独白を続けるが、宗也が見る彼女の横顔には、何かを思いつめるような強い意志が感じられた。

「けど、あなたはまだ運がいいです。まだ助かる余地が残っているんですから」

「そつか……これでもまだ運がいいのか。今さらだけど、本当にありがとう、知り合いでもない俺を助けてくれて」

宗也の顔は、先ほどまでの暗い顔とは違い、少しだけ表情が軽くなつたようだ。

心から感謝の言葉を聞いたリナリスは、人を平氣で銃で撃つていたと思えないくらい、聖母のような暖かい笑顔を浮かべた。

「それはそれとして、他にも分からぬことがあるんだが聞いてもいいか？」

「まだあるのですか？　この際なので、聞きたいことがあるのですからどうぞ」

少し心に余裕が生まれた宗也は、今まで疑問を持っていたことを暴露する。

「非常に聞きにくいんだが……怒るなよ？」

「何を言ひよどんでいるのですか？　私が答えられることなら、あ

る程度はお話しいたします

歯切れの悪い口ぶりに、少々苛立つような声。

「それじゃあ……リナリスの口調、いやもう性格と言い換えていい。なんでそんな二重人格みたいに変わるんだ?」

そう。

彼女の劇的なまでの性格の変化。

それはまるで二重人格であるかのよつな。

(.....)

しばらく黙り込むリナリス。そして、
「そうですね。あまりお話したくはない内容なのですが、別にいい
でしょう。あなたの質問に簡単にお答えするなりば、キャラ付け(・
・・・)ですかね」

「はっ?」

あまりの突飛な返答に口をポカンとあける。

「あなたが凶悪シスター モードと仰っていた方が、私のそもそもその
性格です。しかし、そのキャラでは、シスターなんて神に仕える者
には似つかわしくないしょ?」

「聞かれても困るんだけど、まあ普通のシスターのイメージ的には
優しいとか穏やかつていうイメージが大きいよな」

「そうです、そこで考えました。元々は殺し屋の私としても、今は
敬虔なる神の使徒なので、一応はそれらしくしようと」

「ハイちょっと待った! 今、サラッと無視できないセリフがあつ
た!!」

予想すらできなかつた発言に、今まで落ち込んでいた心をすべて
忘れてしまつくらいの衝撃を受ける。

「話の腰を折らないでください」

憮然とした表情で宗也のツツコミを切り捨てた。

納得はいかない宗也であつたが、とりあえず話をすべて聞いて聞こうと

彼女の言葉に再び耳を傾ける。

「つまりですね。シスターとして相対するときは、優しく包み込むような天使のようなキャラを心がけるようにしています。たまに我慢できなくて、素が出てしまうのが心残りではあります」「我慢できていなつて……結構な頻度であつたと思ひけどな」

「アア？」

「……申し訳ございません」

やはり恐ろしかった。

「ふふつ、よろしい。謝罪は大切ですからね」

その後も、一人で他愛も無い会話を続けていく。

やはり殺し屋というセリフが気になるので聞いてみると、誤魔化されたり、結局睨まれたりして黙るしかなくなつたのだが、最初とは違い、楽しそうな雰囲気が流れしていく。

それは初めて出会つたのかと思えるくらい気楽で、心地よい感覚があつた。

首都ロンドン

ロンドン市内には複数の警察が存在している。

一つはロンドン市警察。

これは、ロンドン市内にあるシティ・オブ・ロンドンと呼ばれる地区を管轄している組織である。ビショップスゲート、スノーヒル、ウッドストリートに三つの警察署を擁し、多くの警察官及び職員が働き、市内の安全を守っている。

一つ目は、ロンドン警視庁。

ロンドン市内のグレーター・ロンドンを管轄する組織である。ヨー・スクットランジヤードを本部として、地元民には警視庁のこ

とを、単にスコットランドヤードと呼ばれることが多い。なおグレーター・ロンドンとはシティ・オブ・ロンドンとシティ・オブ・ウェストミンスターに31のロンドン特別区を加えた範囲を領域としている。

他にもイギリス鉄道警察や国防省警察、非常に小規模ではあるが公園警察と呼ばれる組織まで、多種多様な警察が活動する。

その中で、一人がたどり着いたのはロンドン警視庁であるスコットランドヤード。

警視庁の敷地内には入らず、向かいの通りに静かに車を寄せた。

「さあ、着きましたよ。一応、私は前科持ちなので、お連れすることができるのはここまでです。中に入つてあなたの事情を説明すれば、後は警察が保護してくれるでしょう」

またツッコミたいところであったが、どうせまた言つても意味はないと苦笑し、半ば諦めて車のドアを開け、外に出る。

そのまま振り返り、リナリスト深く頭を下げた。

「本当にありがとうございました。君がいなかつたら、今ごろはどうなつていたか分からぬ。何かお返ししたいところだけど、荷物もすべて宿に置いてきてしまつているから、何もできないんだ。日本人として頭を下げることくらいしか……」

「気にしなくて結構ですよ。そつやつて、感謝してもらひえるだけで。これでもシスターなのですから、無償の愛を与えることは、私にとって喜びもあるので」

言いながら、小さくウインクをする。

宗也の誠心誠意の感謝の言葉に対して、リナリストのおどけたようなその仕草は、暗くなりそうだった雰囲気を消しさつた。

その気遣いをありがたく思いながらも、もう一度彼女に深く感謝を伝え、警視庁へと足を向ける。後ろからは、元気でなあ、と、やはりシスターとは思えない口調で手を上げているシスターの姿があつた。

ロンドン警視庁にて

宗也はリナリスト別れ、ロンドン警視庁の中へと入った。

辺りを見渡してみると、日本でも警察に「厄介になつたことはない宗也だ。このような時、どのようにすればいいのかなど分らない。キヨロキヨロと落ち着きなく視線をさまわせていると、一人の警察官が声をかけてきた。

「へい、ボーア。何かここに用があるのか？」

おそらく年齢は三十代後半くらいだろうか。制服を違和感なく着込み、彼の腕は、まるで丸太のように大きく盛り上がっていた。しかし、その鍛えぬかれたような攻撃的な身体に反して、彼の顔にはシニカルな笑顔が浮かび、気のいいオッチャン然とした雰囲気が漂っている。

最初は驚いた宗也であつたが、親切にも自分に声をかけてくれた彼に自分の状況を説明した。

「俺は、日本から旅行に来た宇佐美宗也と言います。ここに来たのは……」

と言いかけたところで、

「何だ、日本人か？ どうした、また金を掏^すられたか、パスポートでも無くしたのか。それならあつちにある受付に行きな。クレジットカードとかパスポートの問題なら、そこの婦警がどうすればいいのか教えてくれる」

話を最後まで聞かない、目の前の警察官。

やはり日本人は絶好のカモと思われていて、掏りや盗難などの小犯罪に巻き込まれやすいのだろうか。少し面倒くさそうに案内された。

しかし、宗也に起こつた事件はそんなものではない。もしかしたら自分の命まで危ういかもしれない状況である。

宗也は、話を終えたとばかりに背を向けて去ろうとする警察官

を、慌てて呼び止めた。

「ちょっと待つてください！ 昨夜から怪しい人たちに追われているんです。だから警察に助けてほしいんです！！」

その言葉に怪しげな表情を浮かべながらも、仕事柄仕方がないのか、詳しく話を聞こうと奥の部屋へと連れられていった。

待合室のような部屋へと通され、担当の者を連れてくると言い残し、警察官は一人部屋から出て行く。

しばらく待つていると、先ほどの警察官とともに、年配の男がしばらく待つて、先ほどの警察官とともに、年配の男が部屋へと入ってきた。

「君がポルガ君の言つていた日本人か」

壮年の薄汚れた背広を羽織った男性が、宗也の前へと進み出る。「はじめてまして。私の名前は、バーンズ・クラプトンといふ。君はソーヤ君でよかつたね？」

「はい、宗也で大丈夫です」

スッと手を差し出され、握手を求められる。

純日本人としては、握手という作法が珍しいもので少し萎縮してしまつたが、無視するのも失礼にあたると思い、はじめましてと、彼の手を握り返した。

それにバーンズは満足したようで、部屋の真ん中あたりに置かれている椅子を指差し、そこで話を聞いてもいいか、と問いかける。宗也はそれに対し、「はい」と頷いた。

「それでは聞こうか。ポルガ君が言うには、君は誰かに追われているそうだな。間違いではないかね？」

「はい、間違いないです」

バーンズは椅子に深く腰掛け、フムと何度も相槌をうつ。そして、

「それでは詳しく話を聞こうじゃないか。嘘偽りなく、私と彼に君の状況をすべて教えてくれ」

宗也は深く頷き、ゆっくりと昨夜の路上で行われていた事件や、その犯人である黒服たちのことを伝えていった。

その間、一人は一言も声を発しない。一先ず話し終えるのを、ただ黙つて聞いているようだ。

そのまま一通り話し終えると、バーンズは目を細め宗也を凝視する。それは何かを疑つてゐるような、怒つてゐるような視線だ。

「……ソーヤ君。私はすべて教えてくれと、最初に言つておいたはずだが。君の話はどうも大事なところが足りないような気がするのだよ」

その言葉に、バーンズは身体を震わせる。

「例えば……君は、その黒服を着た男たちからどう逃げ延びたんだね？　一晩中走り回つてここにたどり着いたわけでもないんだろう。その事件があつたという通りからこの警察署まではかなりの距離がある。そんな大層なことが起こつたというのに、道も場所も分からぬ観光客がここまで安全に来られるなんて、出来すぎじゃないかな？」

バーンズは机の上で両手を組み顎を乗せて、『どうだい？』とも言つように見つめてくる。

「それは、タクシーで」

「タクシーで逃げてきたとか言つくなよ？　一応、そういうことがあつたのなら、ドライバーから警察の方に連絡が送られるシステムになつているんだよ。もちろん、昨夜からそのような報告は受けていない。となると、君は私にすべてを話していないにも関わらず、嘘までついたことになるな」

宗也の答えを無視して、問い合わせるバーンズ。そして後ろの壁には、最初に出会つたポルガと呼ばれた警官が、腕を組んで寄りかかっている。まるで、これまでの一連の会話に興味すらないかのように。

そんな二人を意識しながらも、宗也はバーンズの言つとおり、彼らに事のすべてを伝えたわけではなかつた。

それには宗也なりの理由と訳がある。

そう、彼に嘘をついてまで隠そうとした話とは、リナリストのこ

とである。彼女は非殺傷とはいえた拳銃を平然と撃っていたり、自らの口から前科持ちですなんて言つていたのだが、彼女には命を助けてもらつたという大恩がある。それなのに、告げ口をするなんて酷いことしたくはないと考えていたのだ。

しかし、そのような理由など警察にはなんの関係はない。彼らにしてみれば、事件ができるだけ詳しく、そして真実を追究して市民の安全を守るのが職務と言えるのだから。

追い詰められた宗也は、下を向いてどうすればいい、とも考えているようで、途端に無口になってしまつ。

そんな姿を見て、バーンズは溜め息を一つ。

「別に悩む必要などないと思うんだがね。ソーヤ君の話を聞く限り、何も悪いことはしていないのだろう? それならば、そうやって悩むことも落ち込むこともない。あつたことを正確に話せば、こちらとしてもスムーズに事を進ませることができるし、君の安全も絶対のものになるんだ。この状況で、何をそんなに躊躇^{ためら}う必要がある」とあるフレーズを強調するような言い回し。

やはり、このあたりは長年の経験なのだろうか。まるで「あらを安心させ、秘密を探り出そうとしているような感じがする。もしくは忠告なのか。今ここですべてを話さないと、警察は君を保護などしない」という。

(…………どこまでもツイていない)

リナリストのことを話さなければ、自分は保護などしてもらえない。けど話してしまえば、無償で助けてくれた彼女の好意を無碍にしてしまう。

本当にどうすればよいのか……自分の心の中に生まれた葛藤が、身体全体を蝕んでいるようだ。

八方塞なこの状況の中、バンッと勢いよくドアが開かれ、二人の男が押し入ってきた。

「特別警察だ。ここに日本人と思われる青年がいると報告があつた」

突如現れた二人は自らを“特別警察”と言い、胸元にあるポケ

ットからバッジのような物を取り出して、バーンズとポルガに見せた。

「昨夜、サウス・ミンスター通りで殺人事件があった。被害者は中年の男性で、詳しい身元は今調べているところだ。その事件の重要な参考人として、そこにいる日本人を拘束したい」

あまりの突然の事態に、何を言っているのか理解できない宗也。それは、今まで話していたバーンズも同じようだ。

「少し待つてもらえないかな？ 拘束ということは、そこにいる彼が、その事件の犯人であるとでも考えているのかい？」

バーンズの質問に頷きをもつて返す二人。

「昨夜の現場で目撃者がいたようだ。その人物が言うには黒髪・黒目の比較的幼い顔つきをしたアジア系の男だと。そう、まるでそこにいる彼のようだ」

言いながら、宗也の顔をじっくりと見回す。

その視線に耐え切れず、スッと目を逸らしてしまった。

「とりあえず手錠を掛けさせてさせてもらうが、抵抗はするな」

「突然すぎではないかな？ 昨日今日の事件で、こうも早く犯人が特定できるわけもない。しかもその程度の証言で、彼を犯人にするのは早計すぎるのではないか？」

怪しすぎる彼らの行動に、バーンズは宗也への行き道を塞ぐ。

「あなたにはすでに関係のない話だ。このように令状も発行されている。これからはこの事件、私たち特別警察が引き継ぐ手筈となっている」

ひつたくるように令状を受け取り、しつかりと確認するが、それは間違いない本物のようだ。

バーンズは諦めたように小さく肩を落とし、わかつた、と言つて道を譲る。さすがの警察官であつても、公的な文書をひつさげた男たちを止めることはできないのだ。

その姿に満足したのか、ニヤリとした笑みを浮かべ、堂々とした足取りで宗也の下へと歩み寄る男たち。そして目と鼻の先で立ち

止り、ポケットから手錠を取り出すと、有無を言わせぬスピードで、宗也の両手を拘束した。

その光景を、すぐには認識できない宗也。しかし手錠を掛けた男の、行くぞ、という言葉でハツと我に返る。

「ちょ、ちょっと待つてください。何がどうなっているか、まったく理解できないんですが！ 確かに昨夜、殺人現場を見てしまったけど、犯人は俺じゃないです！！」

「今、お前の話を聞く気はない。この建物の前に、車を待機させたある。まずはそれに乗って移動してもらおう」

掛けられた手錠が引かれる。その力の所為で、身体がフラッちよろけてしまうが、それでも強引に連れられ、部屋からも連れ出されてしまつ。

最後の頼みである警察官の一人に向けて、助けてくれ、とでも言つような怯えた視線を送つてみると、その先には、

後姿を、苦虫を噛み潰した表情で見送るバーンズ。

未だ壁際に寄りかかり、やつと面倒くさいことが終わつた、とも思つてゐるような表情のポルガ。

一人の考えていることはまったく違つみたいだが、どちらもこの状況を覆せそうにはないみたいだ。

ドナドナのように、静かに連行される宗也。

その顔はすでに諦めかけているようだ。

逃げ出したいと思うのは当然だが、先ほどから挟み込むように歩く男たちの胸元には、やはり無骨な拳銃が携えられている。歩くたびに、内側にあるホルスターに入つたその拳銃がチラチラと見え隠れしていた。

そして、警視庁の門前に止まつていた車の、後部座席に押し込まれる。そのままドオルルンという独特な低いエンジン音をかき鳴らし、三人を乗せた車は発進していった。

警視庁前の通り——

リナリストは宗也を送り届けた後、タバコに火をつけて一服していった。車の中には、コラコラと揺れる紫煙が漂い、灰皿にはたくさんの吸殻が乱雑に捨てられている。まさかこんな女性がシスターであるなど、誰が想像できるだろうか。

リナリストはタバコを吸い終えると、全体が真っ黒で三文字のローマ字が描かれている箱から、再び一本取り出して、オイル式のライターで火をつけた。

もうここに来てから一十分以上過ぎているだろう。宗也が中に入つてから結構な時間が経っている。

本当ならば、こんなところで長居したくはない。しかし、リナリストの視線は、ずっと警視庁の門前に向けられている。

その様相はあるで、何かを待つているようだ。

さらに十分ほど時間が過ぎたその時、この場に相応しくない黒塗りの車が一台、門の前で停車した。中には、二人の男が乗っている。彼らはそのまま車から下りて、少し会話を交えた後、警視庁の中へと消えていった。

その姿を、鋭い目つきで追うリナリスト。

しばらくすると、中から先ほどの男たちと、見覚えのある青年が出てくる。両脇を固められ、手には手錠が掛けられているようだ。それを見て、口の端を吊り上げるような凄惨な笑みを浮かべて、吸っていたタバコを噛みちぎる。そして、

「ハツ……ビンゴだぜえ」

と、吐き捨てるような一声。

そのまま、青年と男たちが車に乗って走り出すと、リナリストも同様にエンジンをかけて、彼らを追いかけるように走り出した。

「宗也は手錠をされた手をじっと見つめ、無言で座席に座っている。

男たちも何も話さないため、車内には一切の会話もない。

しかし、車はそんなこと関係ないとでも言つかのように進んでいく。

今はロンドン市内にある警視庁からロンドン離れ、近代的な建物も高い石造りの街並みも、次第に無くなり、閑散とした雰囲気が辺りを漂っている。

他の車も疎らには走ってはいるが、やはり中心街に比べると圧倒的に数が少ない。

その道中、無言で下を向いている宗也であつたが、やはり不安なようで、勇気をもつて隣の男に話しかけてみた。

「あの……どこに向かっているんですか？」

その質問に、男は今まで黙っていた口を開いた。

「これから向かう場所は、特別警察の収容所だ」

短い返答だったが、何故そこに行かなければならないのか理解できない宗也は、再び尋ねた。

「収容所って……俺は日本人なんで、いきなり拘束できなければと思うんですが」

「確かに引渡し協定を結んでいない国の場合、犯罪者は母国に送還せねばならないが、何もすぐにというわけではない。まさか罪を犯した外国人を、送還するまでホテルにでも泊まらせるなどありえないだろう？だから一時的に収容する施設に、お前を連行することになつている」

なるほど、と一瞬思つてしまつたが、当然、彼の発言には納得

できない。

「その前に、俺は犯罪者じゃあないんですけど……さつきの警察の人
に一通り説明してあるので、話を聞いてもらえば分かるはずです」
もちろん、宗也の言っていることは真実であるのだが、彼らは
それを信用しなかった。

「その話は、後でこちらでから聞かせてもらつ。……そろそろ大丈
夫か？」

反論を一言で終わらせ、ドライバーに何かを確認しているよ
うだ。その間に、運転しながらも車の周りを確認したドライバー
が、ああ、と短く返す。

宗也も気になつて周りを確認してみれば、かなり遠くまで来た
のだろうか。そこは人も建物もない、閑散とした荒野が広がつてい
た。

そこに車を停車させ、降りろ！　と、乱暴に車から押し出さ
れる。

降り立つたのは、ウエスタン映画の舞台にでもなつていそうな
場所。さすがにカウボーイや酒場はないが、日本にはない特別な風
景に、しばし状況を忘れ圧倒されてしまった。

しかしよく見回すと、彼らが言つていたような収容所らしきも
のは見当たらない。それどころか、人工物の気配すらないようだ。
(まさか、秘密基地みたいに地下に隠しているとか言わないよな?)

疑問を感じながらも、二人を振り返る。

その瞬間、宗やは驚愕の表情をして目を見開いた。

視線の先には、拳銃を手に持ち、銃口を宗也へと向けている男
の姿。

その男とは、ここまで連行してきた特別警察の男であった。

男は銃口を向けたまま、口を開く。

「お前もツイてないな。まさか、あの現場を叩撃しちまうなんて…
…お陰でここで死ななくちゃならねえ」

その突然の行動とセリフに、未だに脳の整理が追いつかない。

それを見て思つたのか、

「何が起きたのか理解できないつて顔してるな。まあ、それも分からなくもない。ただ、お前はここで死ぬ、それだけだ。一応、最後の言葉くらいなら聞いてやつてもいいが、どうする？」

それを聞いても、宗也の身体は硬直したまま動かない。それでも何とか口だけは動かすことができた。

「ど、どうこいつなんだ？ なんで、銃を俺に向けているんだよ。ちゃんと説明しろよ！！」

あらん限りの大声で怒鳴り上げる。

男はそれを面倒そうに見るが、仕方ないとでも言つとうに話しが出す。

「お前は見てはならないものを見た。理由としてはそれだけだ」

「そんな理由で納得できるわけないだろ！？ それにお前ら警官じやないのかよ！！」

「いや、警官なのは本当だ。ただ……裏の世界に繋がりがあるってだけだ。昨夜の事件、あれは単純な殺人じやあなくてな。お前にも分かるように簡単にまとめると、組織の裏切り者を追い詰めて、始末していたらしい。それをお前が目撃しちまつたつていうだけの話だ。どうだ、理解できたか？」

「だからって、どうして俺まで殺そつとするんだ！ ん俺はお前らと関係ないだろうが！！」

宗也は必死に弁解を試みる。しかし、

「残念ながら、すでに見ちまつたことが問題だな。裏組織と呼ばれるものは、なんの例外なく秘匿されているものだ。しかし、それが少しでも明るみに出る事態になつたらどうする？ そう、口封じさ。實際にお前はそこまで知らなかつたろうが、少しでも露見する可能性のあるお前を放つておけないから殺せといつ、上方からの命令だ」

「そんなどうしようもない理由に愕然とし、膝を地面についてしまう。

宗也の崩れ落ちた姿を見た男は、ゆっくりと近づき、拳銃を構えた。

「話はこれで終わりだ。次はお前を助けたつていうシスターを始末しなくちゃならない。最後の言葉にしちゃあ随分と長かつたが、満足しただろ？」

握る拳銃に力が入り、宗也の頭に押し付けられる。

「それじゃあ……サヨナラだ」

その場に一発の激しい銃声が鳴り響いた。

ロンドン警視庁にて（後書き）

リナリスが路上でタバコを吸っているシーンがありますが、すでに公共の場はもちらんのことレストランやカフェでも禁煙になっています。罰金も相当な値段を取られます。ちなみに、吸っている銘柄はJ・O・U。もしくは、J・P・Oです。

再会と真相

荒野に一発の激しい銃声が鳴り響いた。

途端に、宗也の頭に押し付けられていた拳銃の感触がなくなる。閉じていた目を恐る恐る開くと、先ほどまで目の前に立っていた男がぐつたりと倒れていた。

予想していなかつた展開に、車に乗っていたもう一人の仲間の顔も驚愕を露わにしている。

その時、遠くから爆音を鳴り響いせ、一台の車が猛スピードで向かってきた。

死の緊張から開放された宗也は、ぼんやりとした表情でその車を見つめている。やがてだんだんと大きくなるシルエット。そして、ドライバーがはつきりと視認できる距離まで爆走してきたころ、宗也の目は大きく開かれる。

それは見覚えのある顔。

緩くウェーブのかかった金髪と、女神のように整った顔立ちの女性。

しかし、そんな顔立ちをすべて台無しにするかのような、猛禽類のような凶悪な笑み。

リナリスト・J・フォルスターだ。

「バオォン！！」という轟音が、寂れた荒野に響きわたった。

地面が剥き出しになつてている道を、ガタガタと激しく揺れながら最高速度で駆けぬける。

（ギリギリ間に合つたか）

視界に宗也が入つたときには、すでに拳銃を向けられ、いつ撃たれてもおかしくない状況だった。

その光景が見えたとき、愛用のS&W M500を窓か

ら突き出よつにして発砲。

放たれた弾丸は空気を切り裂くよつに飛び、宗也の頭に銃を押し付けている男に見事命中した。

それと同時に、男は足の力がなくなつたかのよつて、崩れ落ちるよつにして倒れこむ。

リナリスは神技的な射撃を成功させても、喜ぶよつなマネなどしない。まだ一人車の中に残つてゐるからだ。

リナリスはさらにアクセルペダルを力強く踏み抜き、土煙を激しく立ち昇らせる。

そして逃げよつとしている車に向かつて再び銃を乱射した。

仲間がやられたことによる放心状態から、よつやく抜け出したもう一人の男。

バックミラーを確認すれば、こちらに向かつて爆走してくる車がいることに気づく。顔をよく見ると、運転しているのは組織から抹殺命令を受けている女だ。

報告によれば、昨夜あの女は一人で組織のエージェントを昏倒させるほどの実力者らしい。組織の下つ端とはいえ、拳銃を持った複数の男を、一般市民が撃退できるよつなものではない。

それはある意味、ヤツが裏の人間であるという証明だ。無様に倒れている仲間と、その数瞬前に聞こえた銃声。

おそらく、それもヤツの仕業なのだろう。

あれほどの距離から運転しながら見事に命中をせる腕は、プロと比べてもまつたく遜色ない。

このままあの女と戦闘しても、自分の腕では到底敵わないだろう。俺は、仮にも裏の世界で関わってきた人間だ。それぐらいのこと

が理解できないよつなら、とつこの昔に命を落としている。

そこまでを瞬時に考え、男が選択した行動とは、逃げること。

キーを回し、急いで逃げようとする。しかし焦りのためか、中々エンジンがかからない。その瞬間にもヤツは猛スピードで近づいており、いつ発砲されるのか分かつたものではない。

焦りで震える手をなんとか押さえつけ、ドオルルンといつ音ともにようやくエンジンがかかる。

そのまま一気にギアをマックスに入れて走り出した。

おそらくヤツはある日本人を助けるためにきたのだろう。それならば、あいつを餌に置いておけばコチラは後回しになるはず。

そう考えながら、できうるかぎりの力でアクセルを踏みしめ、この場を離脱しようとする。

しかし、それは甘い空想だった。

ヤツはかなりの距離からの射撃を成功させるほどの実力者。

あの女にとって走り去る車とは、人に比べたらただの大きい的なのだと。

それを履き違えてしまった。

かなりのスピードに乗った車。

おそらく男は安心していたであろう。これなら逃げ切れると。

しかしその瞬間、突然と小さな違和感が身体を駆け巡る。それを感じたコンマ一秒の間に大きな浮遊感を感じる。

瞬間、障害受けたことのないほど衝撃が、身体に襲いかかった。その事態を何も理解することもなく視界が暗転し、男の意識は雄叫びとともに闇に沈んでいった。

目線の先には、上下が逆さまになっている車。シューっと煙を上

げながら、ただただ沈黙している。

その光景を呆然と見つめる宗也。

これまで、瞬く間に変化する状況に頭がまったく付いていかない。殺される！－－と感じた時には、目の前の男が突然地面に倒れふし、助かつたと思つたら見覚えのある車が、猛烈なスピードで爆走してくるのだ。

それを見て、慌てながら逃げ出すもつ一人の男。

しかし、後ろから複数の銃声が聞こえたと思つたら、走り去った車がいきなり激しく横転した。

そのスタンートばりに啞然としながらも、ヨタヨタとおじさんのように立ち上がる。

その時、前とは違うゆっくりとした速度で宗也の横で立ち止まる一台の車。車内には、警視庁で別れるまで一緒にいたリナリストが乗っている。彼女はニータニタとした笑みで、窓から身を乗り出すように顔を出した。

「よひ、さつきぶりだなあ。そんなアホみたいにボーッとして……どうした？」

ケタケタと人を小馬鹿にしたような口調。

未だに状況がほとんど分からなかつたが、目の前にいる彼女が、またも自分を助けてくれたことだけはなんとなく理解できる。

宗也は焦つたような声で、

「ど、どうしてリナリストがここにいるんだ。俺とはもう会うことはないって言つてなかつたか？」

その第一声に一層笑みを深くする。

「どうしてつて……お前を警視庁に送つてから、ずっと門の前で見張つてたからなあ。ソーヤが手錠されながら出てきたときなんか、かなり笑わせてもらつたぜ」

「いや、だからなんで見張つてたんだよ……」

なかなか噛み合わない会話にリナリストを軽く睨みつけたが、そんなものどこ吹く風とも言つような表情。

「まあ、詳しい話はここから移動しながらだな。他にあいつらの仲間が来ないとも限らねえから、さっさと乗れ」

そう言つて、親指で助手席を指す。

宗也自信また狙われるのは勘弁だったの、そこは素直に車に乗り込んだ。

ドアを閉め、シートベルトをしっかりと締めたのを確認すると、それじゃあ行くぜ、とその場から走り出した。

再びリナリストの車に乗った宗也は、もう一度質問を繰り返した。
「で？ 同じことを聞くが、どうしてリナリストここにいるんだ？」

先ほど疑問を流されたことに、少し不満顔だ。

「そんなことより“また助けてくれたありがとう”って、最初に言うべきじゃないのか？」

すでに宗也是彼女に一回も命を救われた身だ。確かに、ここは感謝の言葉を先に言つべきなのは間違いではない。

「……悪かったよ。リナリスト、俺を助けてくれてありがとう」
その言葉に満足したようで、どおいたしまして、と返事を返した。
その後、リナリストがどうしてここにいたのかの話を詳しく聞かされる。

「まず、説明しなくちゃならねえのは、ソーヤはただの囮だつたってことだな」「

その歯に衣を着せぬセリフに、宗也是顔を僅かにしかめるが、彼女は話し続ける。

「昨夜に襲ってきた奴らはバカだったが、おそらくどこかのマフィアの人間だろうさ。殺す現場を見られて、逃げた一人以外は撃退されちまつたんだから、また襲いかかってくるなんてこたあサルでも分かるよな？」

宗也是それに頷いて答える。

「仮にも奴らは組織だってたんだ。もしかしたら、バックにいるの

はかなりの大物かもしけねえ。そつだつた場合を考えて、お前を警察に連れてつた

まさかそんな危険なやつらだったとは露とも思わなかつたので、改めて彼女に聞かされると、さらなる恐怖に身体が震える。

しかし、そこまでしつかり考えて警察まで連れて行つてくれたりナリスには、感謝の念を送つておいた。彼女にはつきり“囮”だと言われたことも忘れて。

「けど、それだけ大きい組織だつた場合、警察にいても安全じゃねえ」

リナリスの好意に感謝していたのも束の間、リナリスのその言葉に、「んん？」と違和感を覚える。話はさらに続けられ、

「最初に言つたとおりただのゴロツキだつたら、保護されて日本に返されるだけだつたらうから問題ねえが、本物のマフィアだつたらなにかしらの手を使って、お前を抹殺しようする。案の定、警視庁の前で見張つてたら、怪しい奴等がノコノコと現れるじゃねえか」「ちょ、ちょっと待て。それじゃあ、あれか!? 僕はそいつらをおびき寄せるための餌だつたのか!?!?」

「だから最初に言つたろ？ お前はただの囮だつたって」

リナリスはさも当然のような顔をするが、直接的にお前は囮だの餌だのと言わせて気分を害さない人間などいだろつ。

あまりの真実に怒りを露わにした宗也は、声をさらに荒げた。

「じゃあ昨日の夜に俺を助けてくれるつて言つたのはなんだつたんだよ！…」「

「ん？…………ああ、その話か。俺はどっちでも良かつたんだよ。あのまま教会にいて奴等が襲い掛かつてこようが、お前を警察に送つて襲つてくるのを待つてようが。どちらかと言えば、また教会の中を荒らされなつた分、今の方がマシだがな」

宗也の怒りを無視するかのように、淡々と返答する。

「なんだそれ!? お前せいで俺は、もう少しで死ぬ寸前だつたんだぞ！…」

魂から響かせるように絶叫する。

それに対してもリナリスは一瞬だけ顔をしかめて、「最後には助けてやつたんだから、別にいいだろうが……それに俺がいなかつたらお前はほぼ100%死んでたんだ。俺がお前を利用しようがしなからうがそれは変わらねえ。」

彼女の言うことは、この興奮した頭でも理解はできる。しかし、それを納得できるかと問われたら否だ。

確かに教会には行かず、自分一人だけで逃げられたとしても、警察に行こうとするのは決まっている。そこで、先の二人みたいなマフィアと繋がりがある男たちにホイホイと連れて行つたら、まず殺されてしまうのは確定だろう。

感情では、自分を凶悪スターなど到底許せないが、彼女に出会わなかつた未来を想像するとバッドエンド以外思い浮かばないのだ。なので、あの一人から助けてくれたりナリスを怒る資格など、宗也は少しも持ち合わせていないのだ。

この板ばさみのような感情に、宗也は押し黙ることしかできない。リナリスはそんな感情を知つてか知らずか、少しクシャクシャになつたタバコの箱を取り出して、宗也の前に差し出す。

「こんな時は、とりあえず一服するのにかぎるぜ。お前もいい年齢^{とし}なんだから吸えるだろ？」

一本だけ箱から伸びているタバコを抜き取り、口に咥える。^{くわ}隣からシユボツという音ともにジッポで火を点けられた。そして一息だけ吸つたところ、

「ゲホッ！ ゲホッ！！」

思い切りむせた。

「ハーン？ なにやつてんだよ、お前。もしかしてタバコも吸えねえオコチャマなのか？」

未だに激しく咳き込んでいる姿を見て、信じられねえ、とても言いたそうな表情。

「ケホッ……し、仕方ないだろ？ 今までタバコとは無縁の生活を

してたんだから」「

そう言い訳する顔は、苦悶に満ちていて非常に辛そうだ。

「そいつはいけねえなあ。タバコを吸えないなんてお前、人生の半分は損してんぞ？ こいつを機に味をしつかり覚えとけ」

そのセリフはまるで悪魔が人を騙し、悪の道へと誘うかのよう。

実際、その通りなのだ……

タバコを吸つてしまつたおかげで、今は気分が悪い、とシートを倒して横になつていい。やはり初めての喫煙はきついものがあるのか、クラクラと揺れる頭の上に手の甲を乗せてぐつたりとしている。そんな状態に關係なく、車はガタガタと揺れながら突き進む。その振動は体調の悪い身体を余計に悪化させ、大きく弾むたびにウウッと小さなうめき声を漏らしていた。

周りの風景は寂れた荒野から移り変わり、今は都會とは口が裂けても言えない街の中を走つていい。キレイな小川が流れる橋を渡り、敷地の広い家々が立ち並ぶ住宅街を通り抜ける。

しばらく平坦な道をまっすぐ進んでいいと、だんだんと緩やかな勾配にさしかかった。その先は小さな丘のようになつていて、頂上付近には平屋の家がポツンと建つていい。

リナリストは丘を登るためにペダルをグイッと強く踏み込んだ。どうやらこの車が目指しているのはあの家のようで、奥には木々が生い茂る森があるだけだ。

家に到着すると、

「おい、着いたぞソーヤ。寝てないでさつさと起きろ」

「バシッ」と頭を叩かれ驚いて目を覚ます宗也。

叩かれた頭は痛いが、今まで休んでいたため体調の方はすっかり回復しているみたいだ。

キヨロキヨロと辺りを見回してみると一軒の家が目に入った。特にこれといった特徴もない、このあたりでは珍しくもないレンガ式

の造り。

どうやら車は目的地に着いたようで、車庫もない更地に無造作に止まっている。

「教会に帰るんじゃなかつたのか?」

まだ寝ぼけているのか、声に霸気がまつたくない。

「何バカなこと言つてんだ。協会も奴等に場所を知られてるんだぜ? そんなところに戻れるわけねえだろうが……」

それくらい分かれ、トリナリスは頭を抱える。

「んじゃあ、ここはどこだ? お前の隠れ家みたいな場所か??」

「違え。この家はなあ、ロンドンの中でもトップクラスの変人が住んでる場所だ」

その返答にさらなる疑問を感じる。

(変人……そんなところに用なんてあるのか?)

考へてもまつたく分からないが、この凶悪シスターに変人と言わせるほどだ。また個性の強い、イカれた人物じやないよう、と静かに祈りを捧げた。

「あんまり会いたい女じやねえんだが、この状況じやあ仕方ねえ」「どうやらその変人というのは女性らしい。

行くぞという一声により、ボーっとした思考していった状態から慌てて立ち直った。二人はそろって車から降りて玄関へと向かっていく。

玄関の前に着くが、呼び鈴らしきものは見当たらない。

しかしそんなこと最初から分かつていたのだろう。

リナリスがドアの前に立つと、突然そのドアを蹴破った。

「はああ! ? なにやつてんの、お前! それ器物破損だらうが

! ! !

まさかの犯罪を信じられない宗也は、すぐにリナリスを止めに入

る。

「なにすんだよ。どうせ呼んでも居留守使つて出てこない引きこもりだぞ? それに俺たちが来たことなんて、この街に入った時から

「つ、ついに戻づいてるんだよ」「

『じゅやうここに住んでるのはとんでもない出不精な人みたいだ。

最後の言葉の意味は分からなかつたが、きっとこの家の住人とリナリストは、こんなこと問題ないくらい仲の良い間柄なんだろうと無理やり納得して、彼女の拘束を解こうとする。

しかし、そうする前に、

「なあ……聞くが、テメエどう触つてんだ？」

自分が触つている箇所がどこだか分かつた途端、顔を青くして急いで手を離す。

「す、すいませんでしたーーー！ 別にわざとかじゃないんです

！ そう、アレなんです。不慮の事故みたいな……」

「なんでもいい……その手を俺の胸からさっさとどけろ。じゃねえと、テメエの頭を吹き飛ばすぞ」

「ヒイイイー！」

絶対零度の視線に、身体全体が震えだす。その寒気は、まだ南極か北極で素っ裸でいる方がマシだと思えるくらいだ。

次はねえからな、という最後の宣告を受けた後、身体の硬直が解けた宗也は心臓をドキドキさせながらリナリストの背後についていく。

無論、恐怖のドキドキであるのは言つまでも無い。

家に入るとそこは普通と言つてもいい内装だったが、なにか違和感のようないものを感じる。

リビングにはテーブルやソファーなどの家具が並んでおり、ただの一般家庭と遜色ないよう見えるのだが何がが足りない。

よく周りを見ると、その違和感がなんだつたのか気づいた。

「やうか……ここには家電製品がほとんどないんだ」

普通の家庭ならば、テレビやパソコンなどがあつてもおかしくはない。しかし、ここにはそれどころか電化製品を使うためのコンセントやコードまで見当たらないのだ。

「ものす」機械が嫌いなアナログ人間とか？」

それは確かに変人だな、と考えていたら、部屋の扉から顔だけ出
したリナリストから声がかかる。

「おじいちゃんはやく来い」

それを聞いて、家の奥にある書斎のよつな部屋へと足を踏み入れた。

そこには壁一面にある棚があり、華張りの本がぎっしりと隙間なく並びんでいる。ある意味圧迫感を感じるほどの量だ。

街は、この森の一角に不審のテ
ーパーと椅子がなんど置かれて
いるだけ。

リカリストの部屋の真ん中に立、

おはるが、見えてるんだよ。さあさと開けて、宗也とリナリスの二人しかいない部屋で、誰かに向かつて話しかけた。

しばらくそれを変な目で見ていた宗也だったが、もちろん誰かが

四一六

一早く開けねえと、この家をハチの巣にするぞ……」

地獄の使者のような低く唸るような声に、宗也はまたもやられてしまふ。彼女はいつたい何がしたいんだと疑問をもつたその時、田の前の本棚がゴゴゴゴゴゴゴゴという鈍い大きな音を奏でながら、ゆっくりと地面に潜つていいく。埃が舞い踊るせいで、腕で田を覆つてしまふ。

音が鳴り終わつた後、恐る恐る腕を退かして目を開けると、そこ

には本棚がなくなり地下へと降りる階段が。
突如見れた階段を見た「あは、

生涯で一番かもしけないほど絶叫した。

新たな出会い

予想もしなかつた出来事に、悲鳴のような大声を上げてしまった宗也。

目前には、先ほどまで存在の臭いすら感じさせなかつた、地下への階段が顔を出している。

隣に不機嫌に立つてゐるリナリスはこのギミックを知つていたらしく、特に驚きを感じていないみたいだ。開かれた階段を見て、始めからそオすりやいいんだよ……、と嘆息していることからも分かる。

口をボケーっと開いたまま、呆然としている宗也の背を押すように、そのまま階段を下りていく。

グルグルと回りながら下りてゐるといふことは、造りが螺旋状になつてゐるのだろう。明かりは少なく、階段を支えている中心の円柱に、非常用ライトのようなもので微かに足元を照らしてゐるだけだ。

カツン、カツンと二人が歩く金属音だけが辺りに響き渡る。

リナリスを先頭に後を着いていく形になつてゐる宗也は、この不思議な場所について問い合わせてみる。

「なあ……イギリスの一般家庭には、こんな風にでっかい地下があるのか？」

リナリスはそのまま前を歩いたまま、答える。

「言つたろ、ここに住んでる女は変人だつて。普通の家に地下室があつても、ただの物置だつたり、ワインを保存するためだけの小さな部屋があるだけだ。こんなアホみたいな個人の家は他にねえだろうさ」

ふうん、と軽く相槌を打つが、やっぱり相当な変わつたヤツなの

かと思つと、会う前からげんなりしてしまつ。

歩き始めて数分。

よつやく最深部に到着したかと思えば、田の前には重厚な鉄製の扉。

それはまるで、ドテカイ爆弾が落ちてきても守つられるようなシェルターのよつ。

その重々しい扉を見て、宗也の口は引きつった。

「……あらためて聞くけど、ここにはどんなヤツが住んでるんだよ？」^この中に入るとしたら、引き籠もりじゃなくて立て籠もりつて言つた方が正しいだろ」「

「だから変人だつて。頭に超弩級つて付くけどな。こんな馬鹿げたシェルターに立て籠られたら、突破するのに最低でもスカッズミサイルでもブチ込まなくちゃならねえからな」

（そんなに強度があるのか……コレ。そんなレベルだつたら、歩兵じやまず突破不可能だろ？）

一人が扉の前で話していると、突然ウツーーーーーーーと「う甲高いサイレンが鳴りだす。両端の丈夫に取り付けられてくるライトが赤い光を放ちながら回転していた。

密室という空間で聞こえる高音は、半端無く耳に響く。そのため宗也だけでなく、リナリストまでもが呻きながら、両手で耳を押さえていた。

「ゴツゴツゴツゴツ」と振動しながらゆづくじした動作で開かれていく扉。

おそらくその扉も大きい音を出しているんだろうが、サイレンの音が大きすぎて聞き取ることはできない。

ただ扉が開かれるだけで、たつぱり一分は使つただろうか。

すべて開ききったころには、煩かつたサイレンもなくなり、再び静寂を取り戻していた。

しかし、一人の耳には未だにキーンとした耳鳴りが残つており、軽い不快感に苛まれている。

（はあ～まるで長い間パチ屋にいたときみたいだ。あのときは、黄金の鎧を身に纏つた騎士がなかなか負けなかつたからな……）

そんなどうでもいいことを考えながらも、ついに閉ざされていた重苦しい扉の先が目に入った。

最初に思ったのは、凄いというただ一言。

子供の秘密基地とかそういうレベルじゃない。

正面には巨大なディスプレイが設置してあり、周りにはよく分からぬ機械類が所狭し並べられている。そして、ガラス張りの奥の小部屋には、300テラフロップスぐらいは余裕でありそうなスーパーコンピュータが鎮座^{ちんざ}していた。

それはまるでどこかの司令部のような様相を醸^{かも}しだしている。しかし、中には一人もいない。

俺たちが扉の前に立つたのを見計らつたように開いたのでそれはないだろうと、室内に入りながら辺りをよく見渡してみる。歩きながら視線をキヨロキヨロとさせているが、改めて見るとやっぱり凄い。

宗也も男だ。

こういう部屋には、何か憧れのようなものを感じるのだろう。顔が子供のように輝いている。

そんな宗也とは違い、リナリストはまっすぐに正面にあるディスプレイへと歩いていく。

その足取りに迷いはない。

そして、ディスプレイの前に置かれている立派な社長イスの後ろに立つと、それを勢いよくクルリと回転させた。

「……なに？」

正面を向いたイスの上には、ポツンと胡坐をかくように座つた人の小柄な少女。

まだ幼い風貌、なにも感じさせない冷めた目、栗色の髪をボブカット正在进行。

そんな彼女は抑揚のない声で文句を口にしたが、そんなことにも

まったく動じないのがリナリスだ。

「相つ変わらず陰気なキャラしてんない、アテナ。会うのは久しぶりだが元気にしてたか？」

自分の文句に応じてもらえなかつたのにも関わらず、アテナと呼ばれた少女の顔に変化はない。

「……はい。あまり会いたくなかったですが、久しぶりです、ただけは一応言つておきます」

「俺もあんまりお前さんに会いたくなかったさ。けど、ちょっと問題の解決のためにアテナの力を貸してもらおうかと思つてなあ」

その言葉に対し、微かではあるが顔を顰めたような気がした。どうやら少女は単に無表情という訳ではなく、あまり感情が表に出ないタイプみたいだ。

「あなたがここに来るときは、手を貸せという話しかないですから分かつていましたが……問題とは、あなたの後ろに立つている人のことですか？」

「ああ、その通りだ。後ろの日本人、名前はソーヤって言つんだが、昨日からマフィアっぽい連中に終われててよオ。さっきなんて本氣で撃ち殺されるところだったんだぜ」

宗也が襲われているシーンを思い出したのか、ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべている。

一人イスに座つているアテナも何も感じさせない瞳でジーーと宗也を見つめる。

その一人の視線に耐え切れず、

「そんなんにじつと見ないでくれ

と、なぜか降参したように両手を挙げた。

「ハハッ、お互い初対面なんだ。自己紹介でもしたらいんじゃねえか？」

その言葉に「クツと小さく頷くと、宗也を見つめたまま話し出した。

「……私はアテナ。ずっと前からこの家に引き籠もつてる」

「……それ、自分で言つちやうんだ。つていうか引き籠もりつて気づいてたんだな」

まさかのカミングアウトに小さく呟く宗也だったが、そのまま紹介を続ける。

「俺は宇佐美宗也。日本から旅行に来たんだが、なぜか死にかけるほど厄介なことに巻き込まれて一十五歳だ」

その紹介に、ん。と可愛らしく返事する。

「二十五歳だつたら、私より五歳も年上」

アテナの発現に、そうなのか、と普通に返したが、「はああああ！？」俺と五歳違つてことは二十歳なのか！？ そのなりで！？」

そう、アテナはどう見ても成人しているよつには見えない。

身長も150cmあるかないかだし、彼女の頬は子供のようにふつくらしていて、プニプニと弾力もありそうだ。

「それは不本意。私はお酒もタバコも経験すみのアダルティーな女性

宗也の反応に不満があるのか、子供のように頬を膨らませた姿は、まるでハムスターみたいだ。その可愛らしい仕草を見てしまつと、子供っぽくて和む、と思つてしまつ。

しかし横から邪魔が入る。

「なに怒つてんだ、アテナ。お前、自分が子供に見られるのが嫌だからつて白衣を着て、大人っぽく見られるよつにしたいって言つてただろうが」

彼女はリナリストであり、科学者のような真っ白い白衣を羽織っている。

最初に見たときは、そのアンバランスな衣服に多少目を見張つたものの、他人の趣味だからと自分に言い聞かせ、失礼な言葉を飲み込んだのだ。

なのに、それを口に出してしまつリナリスト。

その言葉にムムムツという唸り声を出しながら、なんで自分は彼

女にそんなことを話してしまったんだろうと悔やんでいるよつだ。

そんな顔をするアテナの仕草はやっぱり和む、と思つてしまつ。

「……宗也は？ 子供っぽいって思う？？」

子リスみたいに縋り付く声色に宗也は思つた。

（はい、もちろん）

なんてことは、当然口に出さない。

日本では宗也も社会人の端くれだった男だ。会社は潰れてしまつたが……。

（それぐらいのことでは、この不景氣といつ名の暗黒時代を生きている男は崩れないのだよ）

なので、

「そんなことないだろ？ こんなところに一人で住んでるんだ。引き籠もりだったとしてもちゃんと自立はしてるんだろうし、十分立派な大人だと思うぞ」

まつたく根拠のない言葉でも、大人という単語に反応したアテナは、ん。と少し嬉しそうに微笑んだ。

「ハーン？ ソーヤ、お前はアテナの身体的な特徴にまつたく触れてねえだろうが。当たり障りのない言葉で誤魔化すんじゃねえぞ」 盛り返したと思われた機嫌を、リナリストはものの見事に急降下させる。

その言葉にアテナどころか、ソーヤまでもが加わり、二人一緒に冷たい目で見つめた。

「……なんだよ」

さすがにそんな目をする一人を見て、自分が悪いと悟つたのか、尻すぼみになりながら口を噤む。

その不貞腐れたような珍しい反応に、二人は満足した。そこで宗也にある疑問が。

「そういえば、アテナは俺のことぢゃんと“宗也”って発音できるんだな。リナリストが呼ぶときは“ソーヤ”って訛るのに」「日本のアニメは好き。だから、和名はよく見る」

(日本のアニメは世界でもたくさん放映されているのは知ってるけど、それ吹き替えじゃないの?)

「……好きだから、日本語版の原作も集めるのは当たり前」
「考えていることがばれたのか、聞き出す前に答えられてしまつた。(……つていうか、それって当たり前なんだ)

宗也自身も、少年誌で連載していたものや、有名になつたアニメなどは見たことはある。しかし、そこまでのめり込めるほど好きでもなかつたので、アテナの感性は少し理解ができなかつた。これが国を越えたグローバリゼーションというものかと、まったく関係ないところで納得していただぐらいだ。

「おい、俺を無視すんじゃねえよ。名前なんてどう呼んだって伝わればいいだろオガ。だいたい、日本人の名前は角張り過ぎてんだよ。もう少し流れるような読み方にしろつての」

アテナと違つて、こっちの女性は分かりやすかつた。

その肝胆とした物言いに苦笑してしまつ。

「つてか、お互い自己紹介はもう十分だろ? サッセと本題に入るぜ」

リナリスは宗也の態度が気に食わなかつたようで、大きく舌打ちをしながら話を変えた。

「ちょっと待て、リナリス。お前に助けてもらつたのは感謝してし、事件に巻き込んだのは悪かつたと思つてるが、彼女はまだ奴等と関係ないだろ?」

「ハアン??」

ここまで来ておいてなんだ? とでも言いたそうな表情。

しかし返答は彼女ではなく、イスに座つたままのアテナから返つてくる

「……リナリスのことだから、どうせ無理やり手伝わされる
諦めたかのような小さな溜め息。

それを聞いて、

「俺のことよく分かつてるじゃねえか、アテナ」

と、すでに彼女のトレードマークになつてゐるであらう、口の端を吊り上げるような笑みをした。

その後、リナリスは地上に移動して話そうと言つたが、アテナのここから出たくないといつ、親がいたら涙を流してしまいそうなセリフで諦めることになった。

仕方がないので、そこらに転がっている物を椅子代わりにして、アテナの傍に向かい合つようにして座る。

現在、自分たちの状況を説明しているのは、専らリナリスだ。初めは宗也自身で起こったことを話していたのだが、途中からは事態の予想や見解なども必要になつてきたため、より詳しく現状を理解しているリナリスに説明する立場をバトンタッチしたのだ。

一応、ここに到るまでの話は一段落したようで、少々疲れたよう

にポケットからタバコを取り出して、一服しようとす。

「ここ禁煙。精密機器にタバコの煙は厳禁」

アテナに注意されたリナリスは、タバコを吸えないことにイライラしているようだが、ここは彼女の家だ。家主がダメと言つてゐるのだから、喫煙してはいけないことは当たり前だ。

なんとか震える手でタバコを元の場所に戻した。

（それぐらいの礼儀はあつて良かつた……）

僅かに安堵の表情を浮かべる。

「つで、どオだ？ こんだけ派手にやらかしたんだ。やり方は分からねえが、俺の推察だと執拗なくらい追いかけてくるのは目に見えてるだろ」「てるだろ」

「……うん。国が管理する特別警察まで動かせるなら、相当な規模の組織。一人を放つておぐのも危険だから、かならず探しているはず」

顎に手を当て、考え込むような態度で頷く。

「だろ？ んで、アテナ。おさんの腕を見込んで、俺たちに手を

貸してほしい」

「……何を？？」

「惚けんじゃねえよ。お前さんトップレベルの変人だが、それ以上にハッキングと情報収集能力じゃあ、この国で太刀打ちできるヤツなんていないだろ？」

一人で話がどんどん進んでしまっているが、どうやらこの子はずごい技能を持つていてるらしい。

「CIAにも追われてるくらい凄いアテナ様に、俺たちを狙つてる組織を見つけ出してほしいわけだ。そオすりやあ、後は俺が片付けるだけだからなア」

最後には猛獸のような田をギラギラさせていく。

それよりも、田の前にちょこんと座つている可憐ひしい女性は、国際レベルの犯罪者さんでもあるらしい。

（言われてもまったく実感が沸かないな。もつ、これぐらいじゃあ驚けないけど）

どうやらいろいろなことがありすぎで、驚きに対しても耐性ができたみたいだ。

「……リナリスト、まだ昔のこと怨んでる？」

彼女の怖い顔を見て、突然そんなことを言つたかと思ひつと、アテナは悲しそうに目線を下げる。

その言葉にピクッと肩を震わすが、それ以上の反応はない。

しかし、彼女からは言いようの無い怒りと焦燥が滲みでていた。やはり彼女には何かがあつたのだろうか。時折垣間見えるその雰囲気は、出会つたばかりの宗也には聞けないような何かを感じさせてしまう。

そんなりナリストを見て少しだけ顔を上げると、

「……わかつた、手伝う」と言い放つた。

過去という地雷を踏んでしまった償いか、それともただの哀れみか、まだ会つたばかりの宗也には判断ができなかつた。

了解の意思を伝えて、未だにリナリスの機嫌は戻る」ことはない。アテナも下を向いて、無言のままだ。

そんな二人の空氣に耐え切れなくなつたといつもあるが、せつかく助けてくれると了解してくれた手前、このままの状態と/orのよろしくない。

そこで宗也は、この場の雰囲気を一掃できる技を使うことにした。（はあ）、神様。もしかしたら、彼女たちに助けてもらつ前にそちらに呪されることになるかもしれません。ですが、正直……俺にはこの空氣に絶えられないのです。日本男児である宇佐美宗也。散る覚悟で望ませていただきます）

懺悔にも似たような、天にまで届きそうなほど強く祈る。
そして、宗也の有する唯一の大技を放つ。

グウワシッ！！

そんな擬音が聞こえるくらいの勢い。宗也はリナリスの後ろから、彼女に抱きつくよつた体制で胸を掴んでいた。

その突然の奇行に、アテナは珍しく啞然としている。彼女を知るものならば、ここまで表情を露わにしているのをあまり見たことがないだろう。しかし、そこまでの驚きを表すのは当然だ。怒つているリナリスの胸を掴むという暴挙に出たのだから。下手したら命はないんじゃないかと思うくらいだ。

そんな心配を他所に、宗也は以外と余裕があった。

確かにすごい恐怖は感じるし、胸を掴むという愚行をしている自分が信じられない。

だが、この悪くなつた空氣を戻すためという正当性と、さすがに殺すことなんてしないだろうという樂觀性。その一つを武器に、宗也は仕方が無いんだと理由付ける。

だが、現実は違つた。

何度も向けられたことのある、人殺しのような凶悪な目。

(あ、やばい……目が完全にイッちゃってる。俺、たぶんここで死ぬな。でもどうせ死ぬんだつたら……)

モモモモモモモモ。

追い討ちをかけるよつこ、自ら死線に飛び込んでいく宗也。しかし、そんな能天気な考えは一瞬で吹き飛ぶ。なぜなら宗也の身体も一緒に吹っ飛んでいるから。ゴキツ！－ といづ今まで聞いたことのない鈍い音とともに、顎に強烈なアッパーを喰らうという攻撃をされて。

そのまま辺りの物を巻き込みながら、派手に倒れこむ。

荒事など小さいこりにした限りだ。今ではただの会社員だった男にとつて、この一発は相当きつかつたらしくで、すでにTKOの状態だ。

ギリギリ意識はあるが、もう墜ちる寸前と言つてもいい。何とか仰向け転がつて酸素を確保できたが、虫の息なのは変わらない。そんな状態の宗也に向かつて、リナリスは一步ずつゆっくりと近づいていく。倒れている横に立ち止まり、しゃがみこんだ。そのまま顔を覗きこむようにして接近したことで、彼女の顔はすでに目と鼻の先だ。

朦朧とした意識の中、彼女は天使のような顔をして口を開く。

「悪かったな」

そんな言葉を聴いて、宗也の意識は墜ちた。

―――数時間後

鈍い痛みを感じ、宗也は目を覚ました。

どうやら薄暗い部屋の床で寝ていたようで、なんとなく身体が重い。上半身を持ち上げた途端、鋭い痛みを顎に奔る。

グッと呻き声を挙げながら、片手で押されたところで、自分の状

況を理解した。

(ああ……リナリスに殴られたんだつたな)

気を失う最後、なにかを言われた気がしたが、殴られたおかげでその部分だけは記憶が飛んでしまったようで、まったく思い出せない。

しかしあんなことをして、よく生きていられたなと安堵する。落ち着いて考えてみれば自分はなんて無謀なことをしたんだと、少し前の自分を呪いたくなる。

それでも、生きていることの喜びを噛み締めていると、女性の声が聞こえてきた。

「起きたか、ソーヤ。ちょうどいいところで田を覚ましてくれたぜ」「……逆に、タイミング悪い」

まつたく正反対の言葉をかけてくる一人。なんのことかよくわからぬが、すごく気になるのは間違いない。痛む顎を擦りながらなんとか立ち上がり彼女たちがいるところに歩いていった。

そこには家庭用テレビが置いてあり、二人は揃ってニュースを見ていた。

リナリスは先ほどの出来事について、なにも言わない。

あの一発で手打ちつてことだつたら宗也としても僥倖だ。あんな出来事、自分から掘り返したいなんて誰も思わないだろう。

そのまま彼女たちに近づき、一緒になつてテレビを観賞する。そこに流れていたのは、ある事件の報道だつた。

警官や野次馬が大勢いる現場。

(何か起こつたのか?)

その答えはテレビに移っているキャスターによつて暴かれた。

『臨時ニュースです。先ほど入ってきた情報によりますと、昨夜末明サウス・ミンスター通りで事件が発生しました。スコットランドヤードは、現場の状況から殺人事件と断定。さらに目撃者の情報と捜査から、犯人は日本人であると思われており、現在“ソウヤ・ウ

サミ”といつ名前の男の行方を追っています

画面には、見に憶えのある名前。

その報道を聞いた途端、リナリスは面白そうに口笛を吹き、アナはボーっと見ているだけだ。

代わつて、犯人と思われてゐる宗也は、

またもや大絶叫した。

少し前にした生涯一番だと思っていたほどの大絶叫も、ものの数時間もしない内に更新されてしまった。

新たな出会い（後書き）

宗也の打っていたパチンコは『GORO』です。

今現在、この種類の新台は『暗黒騎士呀鑑○』ですが……

うん、初あたり50%の確率で確変に突入ってかなり辛いよね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4551y/>

あなたの懺悔は何ですか？

2011年11月20日01時17分発行